九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『漢書』藝文志・詩賦略考（上）：屈原、孫卿、賈誼を中心に

中村，昌彦
帝京平成大学現代ライフ学部：教授

https://doi.org/10.15017/4763180

出版情報：中国文学論集. 50, pp.1-16, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『漢書』藝文志・詩賦略考（上）

――屈原、孫卿、賈誼を中心に――

中村昌彦

一　はじめに

『漢書』藝文志の研究の始まりは、班固『漢書』研究の唐・顔師古注からであるが、それは『漢書』の古注を集めた研究である。それ以後の研究の数は膨大である。[1] 目録学としての研究では、古くは梁・阮孝緒『七録』[2]、さらに『隋書』経籍志がある。そもそも『漢書』の一部でもある司馬遷の『史記』には、漢籍目録はなく、漢籍目録は、劉向『別録』、劉歆『七略』に始まり、それを受けて班固『漢書』の中で「藝文志」として編纂された。「藝文志」の中で、劉向、劉歆の編纂精神が色濃く反映されているのが、「詩賦略」であると考える。さらに、「藝文志」全体に、劉向、劉歆の「詩賦略」の精神が大きく影響しているのではないかと考える。その「詩賦略」を「屈原賦」を中心に考察する。

近年の研究では、清・劉師培『論文雑記』（『儀徴劉申叔遺書』五　廣陵書社　二〇一四・二）八を始めとする考証研究、『「漢書・藝文志」研究源流考』、『二十五史藝文經籍志考補萃編』などの史書研究がある。[3] これまでの研究は、「藝文志」に補注を重ねていく方法を踏襲したものであり、総序や各序を踏まえた上での全体的、あるいは相対的な見解は見られない。そこで、本考察では「藝文志」の編者劉向に注目し、王逸注『楚辞』を参照しながら「詩賦略」の編集に関わる問題について考察してみた。そこでは『詩経』精神の継続という視点を置いた。

二　テキストの関係性

「詩賦略」を担当した劉向は、「屈原賦二十五篇」を中心に「詩賦略」をまとめた。それに関係するのが後漢に王逸注として完成した『楚辞』である。後漢の王逸は劉向の「屈原賦二十五篇」をもとに宋玉以後の賦をあつめ『楚辞』を完成させた。「詩賦略」を考える上で、この王逸注『楚辞』の編纂内容は、重要な材料となる。

『漢書』藝文志の総序には次のようにいう。

昔仲尼沒而微言絶。七十子喪而大義乖。故、春秋、分為五、詩、分為四。易、有數家之傳。戰國從横、直偽分爭、諸子之言、紛然殽亂。至秦患之、乃燔滅文章、以愚黔首。漢興、改秦之敗、大收篇籍、廣開獻書之路。迄孝武世、書缺簡脱、禮壞、樂崩。聖上喟然而稱曰、朕甚閔焉。於是建藏書之策、置寫書之官、下及諸子傳說、皆充祕府。至成帝時、以書頗散亡、謁者陳農求遺書於天下。詔光祿大夫劉向校經傳、諸子、詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技。每一書已、向輒條其篇目、撮其指意、録而奏之。會向卒、哀帝、復使向子侍中奉車都尉歆卒父業。歆於是、總群書而奏其七略。故有輯略、有六藝略、有諸子略、有詩賦略、有兵書略、有術數略、有方技略。今刪其要、以備篇籍。

昔、仲尼沒して微言絶ゆ。七十子、喪んで大義乖く。故に春秋、分れて五と為り、詩、分れて四と為る。易に數家の傳有り。戰國の從横、直偽（真偽）、分れて爭ひ、諸子の言、紛然として殽亂す。秦に至り之を患ひ、乃ち文章を燔滅して以て黔首を愚にす。漢興りて、秦の敗を改め、大に篇籍を収め、廣く獻書の路を開く。孝武の世に迄りて、書缺け簡脱し、禮壞れて樂崩る。聖上喟然として稱して曰く、「朕甚だ閔ふ」と。是に於いて藏書の策を建て[4]、寫書の官を置き、下は諸子傳說に及ぶまで、皆　祕府に充つ。成帝の時に至り、書頗る散亡せしを以て、謁者陳農をして遺書を天下に求めしむ。光祿大夫劉向に詔して經傳、諸子、詩賦を校せしめ、步兵校尉任宏をして兵書を校せしめ、太史令尹咸をして數術を校せしめ、侍醫李柱國をして方技を校せしむ。一書已る毎に、向輒ち其の篇目を條し、其の指意を撮り、録してこれを奏す。會たま向卒し、哀帝復た向の子侍中

奉車都尉歆をして父の業を卒へしむ。歆、是に於いて群書を總べ其の七略を奏す。故に輯略有り、六藝略有り、諸子略有り、詩賦略有り、兵書略有り、術數略有り、方技略有り、今其の要を刪り、以て篇籍備ふ。

孔子の後の状況を概説する中で、典籍の散逸と漢代に至ってその収集が行われたことに言及する。それをまとめる際に、劉向が經傳、諸子、詩賦の校訂、編集にあたり、劉向の死後、子の劉歆がそれを継承した。それは、『七略』といい、「詩賦略」はその中にある。

この「藝文志」に関連した記事として、『漢書』「劉歆傳」の中に『七略』について述べた記載がある。

歆字子駿、少以通詩書、能屬文召、見成帝、……河平中、受詔與父向領校祕書、講六藝、傳記、諸子、詩賦、數術、方技、無所不究。向死後、歆復為中壘校尉。……哀帝初即位、……歆乃集六藝群書、種別為七略。語在藝文志。

歆、字は子駿、少くして詩書に通じ、能く屬文するを以て召され、成帝に見ゆ、……河平中、詔を受け父向と校祕書を領し、六藝、傳記、諸子、詩賦、數術、方技を講じ、究めざるところなし。向、死し後、歆、復た中壘校尉と為る。……哀帝、初めて即位す、……歆　乃ち六藝群書を集め、種ごとに別け七略と為す。語は藝文志に在り。

ここでは、劉向が「六藝、傳記、諸子、詩賦、數術、方技」を講義し、劉歆がそれを「七略」としてまとめたことになっている。

以上の資料によって「藝文志」全体と、「詩賦略」との関係についてまとめておくと、孔子の学が、経書、つまり六藝として残り、それが、継承される過程は、一旦、戦国期に不毛となり、漢代になり漢籍をあつめる国家的事業として受け継がれる。ここに関係したのが、劉向である。その劉向は、經傳、諸子、詩賦を担当した。經傳と詩賦は別々のグループとして考え、序の説明ではその関係性については述べていない。しかし、次に取り上げる「詩賦

略」序において述べるように経書の精神は、詩賦へと受け継がれることになる。では、その詩賦の始まりはだれかというと、次に示す「詩賦略」序にいう屈原なのである。「詩賦略」では屈原が、孔子の精神を受け継いだと考えた。

「詩賦略」の編纂は、まずその一部である「屈原賦」の整理が先に行われているはずである。そして前漢末、この「詩賦略」が完成したところで、賈誼や司馬遷が見たであろう「離騒」以外の作品がやっとまとめて「屈原賦」の中へ入れられたであろう。ただ、この屈原作品の考え方に関しては、『楚辞』研究、屈原研究では大きなテーマとして現在も議論が続く問題である。[5]「離騒」以外の屈原作品を漢代の作と考える流れがあるが、ここでは、戦国期の作と考える。[6]

「詩賦略」全体は、次のように5つのグループに分かれる。それぞれのグループの先頭に置かれた賦とグループ内の総数は次のごとくである。この考察では、「屈原賦」と「孫卿賦」を対象とする。

屈原賦　以下二十家、三百六十一篇
陸賈賦　以下二十一家、二百七十四篇
孫卿賦　以下二十五家、百三十六篇
客主賦　雑賦十二家、二百三十三篇
高祖歌詩　二十八家、三百一十四篇

また、「屈原賦二十五篇」から始まる「詩賦略」全体の後序には次のようにいう。ここには劉向が定めた「詩賦略」の定義が述べられる。

傳曰、「不歌而誦謂之賦。登高能賦、可以為大夫。」言感物造耑、材知深美、可與圖事。故可以為列大夫也。古者諸侯卿大夫、交接鄰國、以微言相感。當揖讓之時、必稱詩以諭其志。蓋以別賢不肖、而觀盛衰焉。故孔子曰、

不學詩、無以言也。春秋之後、周道澻壞。聘問歌詠不行於列國。學詩之士、逸在布衣。而賢人失志之賦作矣。大儒孫卿及楚臣屈原、離讒憂國、皆作賦以風。咸有惻隱古詩之義。其後宋玉、唐勒、漢興枚乘、司馬相如、下及揚子雲、競為侈麗閎衍之詞、沒其風諭之義。是以揚子悔之、曰、詩人之賦麗以則、辭人之賦麗以淫。如孔氏之門人用賦也、則賈誼登堂、相如入室矣、如其不用何。自孝武立樂府而采歌謠、於是有代趙之謳、秦楚之風。皆感於哀樂、緣事而發、亦可以觀風俗、知薄厚云。序詩賦為五種。

傳に曰く、「歌はずして誦す、之を賦と謂ふ。高きに登りて能く賦せば以て大夫為るべし」[7]と。言ふこころは物に感じて耑を造し、材知深く美しければ、與に事を圖るべし。故に以て列大夫と為すべきなり。古は諸侯卿大夫、鄰國に交接するに、微言を以て相感ぜしむ。揖讓の時に當りて、必ず詩を稱して以て其の志を諭す。蓋し以て賢と不肖とを別けて盛衰を觀る。故に孔子曰く、「詩を學ばざれば、以て言ふ無きなり」[8]と。春秋の後、周道澻く壞る。聘問の歌詠、列國に行はれず。詩を學ぶの士、逸して布衣に在り。而して賢人志を失すの賦作る。大儒孫卿、及び楚臣屈原、讒に離ひ國を憂へ、皆賦を作りて以て風す。咸惻隱古詩の義有り。其の後、宋玉、唐勒、漢興りて枚乘、司馬相如より、下は揚子雲に及び、競ひて侈麗閎衍の詞を為り、其の風諭の義沒す。是を以て揚子之を悔ひて、曰く、「詩人の賦、麗にして以て則あり、辭人の賦、麗にして以て淫なり[9]。如し孔氏の門人、賦を用ひば、則ち賈誼、堂に登り、相如、室に入らん。其の用ひざるを如何せん」と。孝武　樂府を立てて歌謠を采りてより、是に於いて代、趙の謳、秦、楚の風有り。皆哀樂に感じ、事に緣りて發す。亦た以て風俗を觀て、薄厚を知るべしと云ふ。詩賦を序して五種と為す[10]。

まず、賦と大夫との関係を定義し、詩の重要性を孔子の言を借りて述べる。それが、戦国期を経て孫卿（荀子）と屈原により賦として受け継がれ、漢賦へ繋がるという。孔子の言を借りて賦の意義を『詩経』から解きおこすのは、「藝文志」総序で述べた考えと同じことである。

この「詩賦略」後序に対して、「詩賦略」の先頭に置かれた「屈原賦二十五篇」について、従来の研究を見てみよう。本来、「藝文志」は、『漢書』においては目録であるため、作者と作品数のみが記載されている。それに対する

顔師古注が唐以前の注を集めた初めての研究である。ただ、目録学としては、梁・阮孝緒『七録』が存在する。

近年の研究として『漢書藝文志注釋彙編』[11]では、「詩賦略（一）屈原賦之屬　屈原賦二十五篇」として、次のように述べる。

沈欽韓『漢書疏證』、自離騷至大招、適廿五篇。「隋志」專列離騷一家、云漢武帝、命淮南王為之章句。旦受詔食時而奏之、其書今亡。後漢校書郎王逸、集屈原以下迄于劉向、逸文、自為一篇。并敘而注之、今行於世。

按　顧實曰、「今楚辭離騷一篇、九歌十一篇、天問一篇、九章九篇、遠游、卜居、漁父三篇、凡二十五篇。王逸言、劉向典校經書、分『楚辭』為十六卷。而舊本楚辭亦題護左都水使者光祿大夫臣劉向集。」惟班志無楚辭、豈以原本七略而從略耶。

沈欽韓『漢書疏證』、離騷より大招に至るまでを、二十五篇に適す。「隋志」は專ら離騷一家を列し[12]、漢の武帝、淮南王に命じ之が章句を為り、旦、詔を受け食時に之を奏すと云ふ。其の書、今亡ぶ。後漢の校書郎王逸、屈原以下、劉向迄(まで)を集め、逸の文、自ら一篇を為す。并びに敘して之に注す。今、世に行はる。

按ずるに（以下省略）

「按」に引用する顧實は、『漢書藝文志講疏』の一部の引用であり、全文は次のごとくである。

『漢書藝文志講疏』四　詩賦略　屈原賦二十五篇[13]

存。今楚辭離騷一篇、九歌十一篇、天問一篇、九章九篇、遠游、卜居、漁父三篇、凡二十五篇。其懷沙一賦、為原沉江之預賦、不歌而誦謂之賦。然九歌有歌之名、蓋可歌也。國觴一篇、酷似軍歌。卒之三戸亡秦、原目冥矣。且原為辭賦之祖、於此亦可見其不朽之精神哉。王逸言、劉向典校經書、分楚辭為十六卷。而舊本楚辭亦題護左都水使者光祿大夫臣劉向集、集部之名、蓋始此。惟班志無『楚辭』、豈以原本七略而從略耶。『楚辭』自有楚音、漢宣帝徵能為楚詞。九江被公召見誦讀、隋世釋道騫猶能為之、蓋與古文讀應爾雅、適為南北相對者。存す。今、楚辭離騷一篇、九歌十一篇、天問一篇、九章九篇、遠游、卜居、漁父三篇、凡そ二十五篇。其の懷

沙一賦は、原が江に沉むが為の預賦にして、歌はずして誦し之を賦と謂ふ。然るも九歌に歌の名有り、蓋し歌ふべきなり。國觴一篇、酷して軍歌に似る。卒に之れ三戸亡秦、原、目冥す。且つ原、辭賦の祖と為り、此に於いて亦た其の不朽の精神を見るべけんや。王逸言ふ、劉向、經書を典校し、楚辭を分けて十六卷と為す。而して舊本楚辭も亦た「題護左都水使者光祿大夫臣劉向集」とし、集部の名、蓋し此れより始む。惟ふに班の志に『楚辭』なし、豈に七略を原本とすを以て從略すか。『楚辭』自ら楚音有り、漢宣帝　能く楚詞を為すを徵し、九江被公、召見して誦讀す。隋世の釋道騫、猶を能く之を為す。蓋し古文の讀應の『爾雅』に與し、適南北相對する者と為る。

『漢書疏證』、『漢書藝文志講疏』ともに「屈原賦の二十五篇」の具体的な内容は、王逸注『楚辭』を根拠としている。ただし顧實は、賦の定義からすると、歌など不適格なものがあると指摘する。詩、歌、賦を分類することは単純な問題ではなく、そもそも「詩賦略」という呼び方は、詩と賦をあつめたという文体の話だけではなく、詩から賦へと、という変遷も意味していると考えるべきであろう。つまり序で述べたように賦は、そもそも『詩経』的意味があると考えているのである。

洪興祖・王逸注『楚辭』「楚辭目録」では「護左都水使者光祿大夫臣劉向集」といい劉向が屈原賦の編者であることを明言する。さらにその『楚辭』「離騷経章句第一離騷」の後序として王逸がいう。

敍曰　……而屈原履忠被讒、憂悲愁思、獨依詩人之義而作離騷。上以諷諫下以自慰、遭時闇亂不見省納、不勝憤懣、遂復作九歌以下凡二十五篇。楚人高其行義、瑋其文采、以相教傳。至於孝武帝、恢廓道訓、使淮南王安作離騷經章句、則大義粲然。後世雄俊、莫不瞻慕、舒肆妙慮、纘述其詞。逮至劉向、典校經書、分為十六卷。敍に曰く　……而して屈原、忠を履むも讒られ、憂悲、愁思し、獨り詩人の義に依りて「離騷」を作る。上は以て諷諫し下は以て自慰す。時の闇亂に遭い、省納せられず、憤懣に勝へず、遂に復た九歌以下凡そ二十五篇を作る。楚人、其の行義を高くし、其の文采を瑋し、以て相ひ傳へしむ。孝武帝に至り、道訓を恢廓し、淮南

王安をして「離騒經章句」を作らしむ。則ち大義粲然たり。後世、雄俊、瞻慕せざるなく、妙慮を舒肆し、其の詞を纘述す。劉向に至るに逮び、經書を典校し、分けて十六卷と為す。

ここでは、『楚辞』中の「屈原賦二十五篇」の内容が具体的に示されるわけだが、実はこれは劉向がまとめたものであることは言及されていない。[14]

ここで、あらためて「屈原賦」グループをみてみると、明らかに『楚辞』収録の文人（※）が並べられている。

屈原賦二十五篇。楚懐王大夫、有列傳。※
唐勒賦四篇。楚人。
宋玉賦十六篇。楚人、與唐勒並時。在屈原後也。※
趙幽王賦一篇。
莊夫子賦二十四篇。名忌、吳人。
賈誼賦七篇。※
枚乘賦九篇。
司馬相如賦二十九篇。
淮南王賦八十二篇。※
淮南王羣臣賦四十四篇。※
太常蓼侯孔臧賦二十篇。
陽丘侯劉隩賦十九篇。師古曰、「隩音偃」。
吾丘壽王賦十五篇。
蔡甲賦一篇。
上所自造賦二篇。師古曰、「武帝也」。

兒寛賦二篇。
光祿大夫張子僑賦三篇。與王褒同時也。
陽成侯劉德賦九篇。
劉向賦三十三篇。※
王褒賦十六篇。※
右賦二十家、三百六十一篇。

『楚辞』と直接関わる文人の名（※印）が列挙されている中、淮南王賦八十二篇、淮南王羣臣賦四十四篇については、『楚辞』の中の「招隠士第十二」淮南小山との関係があると考える。

このように「詩賦略」と『楚辞』との関係は、「詩賦略」も『楚辞』も劉向が編纂に関わることが大きく影響している。「屈原賦」に関しては、『楚辞』における屈原の作を「屈原賦」として考え、屈原を慕う文人たちを、このグループに並べた。またこれは、『史記』の伝記とも一致している。

唐勒について『史記』屈原傳の末に次のようにある。

屈原既死之後、楚有宋玉、唐勒、景差之徒者、皆好辭而以賦見稱、然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫。其後楚日以削、數十年竟為秦所滅。

屈原既に死し後、楚に宋玉、唐勒、景差の徒者有り、皆辭を好くし賦を以て稱せらるるも、然るも皆屈原の從容（しょう）、辭令を祖とし、終に敢えて直諫するなし。其の後、楚、日に以て削られ、數十年にして竟に秦の滅ぼすところと為る。

「屈原の死後、楚では、宋玉、唐勒、景差が楚の文辞（うた）をよくし、賦すことで称賛された。しかし、屈原の従容とした態度と言動を敬い慕ったが、結局は、直々の諫めはしなかった」という。この「賦す」という点に注目

したい。天子あるいは各国の王の前で披露することこそ、最高の「賦す」であるが、屈原を慕う文人たちは、「賦す」けれども王への諫めがなく終わったという。単に文辞をよくするだけではなく、賦して諫言することが重要なのである。（『左氏伝』では、「詩」と「賦」の使い分けをする例がみられる。[15]）そもそも屈原は辞をよくし、賦（諫言をともなう）をよくしたが、宋玉以後、屈原の精神を実践するものはいなかった。

『史記』屈原傳ではこの宋玉たちの伝記の後に次の記事がある。

自屈原沈汨羅後、百有餘年、漢有賈生、為長沙王太傅、過湘水、投書以弔屈原。

屈原、汨羅に沈しより後、百有餘年、漢に賈生有り。長沙王太傅と為り、湘水を過ぎ、書を投じ以て屈原を弔ふ。

宋玉、唐勒、景差の後を継いだこの賈誼については、『史記』では、改めて伝記を屈原傳の後に並べる。この賈誼も「屈原賦」グループに配属されている。『楚辞』にも名を連ねる。劉向は、『楚辞』編纂に当たり、『史記』の伝記に依拠しながら、賦の作者を取り上げているが、この賈誼までを一つの系譜としているようである。「屈原賦」のグループに配属される司馬相如は、『史記』において屈原との関係は言及されない。劉向もこれに従っているわけだが、司馬遷が司馬相如の伝記の中で「此與詩之風諫何異（此れ詩の風諫と何ぞ異ならん）。」（『史記』司馬相如列傳）というように、『詩経』精神を受け継ぐものとして屈原賦の中に入れたと考えられる。次に賈誼について考察する。

三　司馬遷以前の賦　賈誼について

司馬遷は、自らが長沙を訪れ屈原を偲んだと言っているが（「適長沙、觀屈原所自沈淵」『史記』屈原賈生列傳・太史公曰）、時代的に司馬遷に近い賈誼、そしてその孫について「賈誼傳」の最後に次のように言う。

賈生之死時、年三十三矣。及孝文崩、孝武皇帝立、舉賈生之孫二人至郡守。而賈嘉最好學、世其家、與余通書。至孝昭時、列為九卿。

賈生の死し時、年三十三なり。孝文の崩ずるに及び、孝武皇帝立ち、賈生の孫二人を舉げ郡守に至る。而して賈嘉、最も學を好しとし、世その家、余と書を通ず。孝昭の時に至り、列して九卿と為る。

司馬遷は賈誼の孫、賈嘉から賈誼についての伝記を得ることができたと考えられる。賈誼の伝記資料としては、明確な出所である。

『楚辞』中に名を連ねた屈原を慕う者の中で、司馬遷の詳細な伝記を持つ者は賈誼だけである。賈誼の賦への考えは、時代で見れば屈原、孫卿に近い。『漢書』賈誼傳にある、賈誼の賦は、当時伝わる逸話としての屈原の傳と賦としての「離騒」をもとに作られたのであろう。

『史記』賈誼傳では、次のように言う。

賈生名誼、雒陽人也。……廷尉乃言賈生年少、頗通諸子百家之書。文帝召以為博士。……

賈生既辭往、行聞長沙卑溼、自以壽不得長。又以適去、意不自得。及渡湘水、為賦以弔屈原。其辭曰

共承嘉惠兮　俟罪長沙
側聞屈原兮　自沈汨羅
造託湘流兮　敬弔先生
遭世罔極兮　乃隕厥身
嗚呼哀哉　逢時不祥
鸞鳳伏竄兮　鴟梟翱翔

賈生、名は誼、雒陽の人なり。……廷尉、乃ち言ふ、賈生年少くして、頗る諸子百家の書に通ず、と。文帝　召して以て博士と為す。……

『漢書』藝文志・詩賦略考（上）

賈生、既に辭して往き、行ゆき長沙の卑溼（ひしつ）を聞き、自ら以へらく壽（じゅ）は長きを得ずと。又た適を以て去るも、意自ら得ず。湘水を渡るに及び、賦を為り以て屈原を弔ふ。其の辭に曰く

韻

共承嘉惠兮　俟罪長沙　（歌）
側聞屈原兮　自沈汨羅　（歌）
造託湘流兮　敬弔先生　（耕）
遭世罔極兮　乃隕厥身　（真）
嗚呼哀哉　逢時不祥　（陽）
鸞鳳伏竄兮　鴟梟翺翔　（陽）

賈誼は漢初において、秦滅亡後の事情を知る士大夫である。賈誼『新書』には、「過秦」が巻頭に置かれ、戦国期の事情を語る。それは、屈原、孫卿の後の状況である。賈誼の時代から半世紀遡れば、屈原、孫卿の活躍時期に至る。屈原の逸話が残る状況は、司馬遷以上に良いはずである。とすると、賈誼が慕う賦は、「屈原賦」の原形、また「孫卿賦」であったことが想像される。賦という表現、つまり『左氏伝』で見られた「自ら詩を作る」が、戦国末期から引き継がれ、賈誼のころには定着していたかもしれない。

賈誼は伝聞として長沙の悪い自然環境を恐れて、自らの寿命を諦めていたが、同時に長沙に伝わる屈原の傳、逸話も聞いていたであろう。つまり、司馬遷も賈誼も、その土地の逸話、伝説として屈原像を見ていたのである。ただし、「離騒」が楚詞という南方の言語で表現されていることから、文学として「離騒」を理解していたかどうかはわからない。武帝が命じて、「離騒」が淮南王安の解釈（『漢書』淮南衡傳また『史記』にはこの記事は掲載されない。）を介して理解できるようになったから、司馬遷の場合は「余讀『離騒』（『史記』屈原賈生列傳・太史公曰）」と言うのであろう。

『漢書』賈誼傳では『史記』賈誼傳になかった次の文が傳の途中に加えられている。

屈原、楚賢臣也。被讒放逐、作離騷賦。
其終篇曰、「已矣、國亡人、莫我知也。」遂自投江而死。誼追傷之、因以自諭。

『漢書』の編纂の時点では、劉向編纂の「屈原賦」（王逸注『楚辞』にある）がすでに存在するために、その一部「屈原、楚賢臣也。被讒放逐、作離騷賦。其終篇曰、『已矣、國亡人、莫我知也。』遂自投江而死。」が、引用できたと考えられる。

このように、『史記』、『漢書』の記述には一部異なる部分もあり、司馬遷のときの状況から、編纂に関わる状況の変化があったことがわかる。

ちなみに、「離騷」について司馬遷から後の解釈が、違っていく状況については、王逸注『楚辞』洪興祖「補注」において指摘がみられる。宋・洪興祖「補注」は唐・顔師古注まで遡り考証する。

王逸注『楚辞』に「屈原……乃作離騷経。離別也。騷愁也。經径也。」とあるが、洪興祖「補注」によれば、次のように「太史公曰」、「班孟堅曰」、「顔師古云」、「余按」と比較検討する。

王乃疏屈原、屈原執履忠貞而被讒袤、憂心煩乱、不知所愬、乃作「離騷」經。離、別也。騷、愁也。經、徑也。言己放逐離別、中心愁思、猶依道徑、以諷諫君也。（「離騷」序）
太史公曰、「離騷」者、猶離憂也。
班孟堅曰、離猶遭也。明己遭憂作辞也。
顔師古云、憂動曰騷。
余按、古人引離騷、未有言經者、蓋後世之士祖述其詞、尊之為經耳、非屈原意也。逸説非是。（補注）
王乃ち屈原を疏じ、屈原、忠貞を執履するも讒袤せられ、憂心煩乱し、愬るところを知らず、乃ち「離騷」

経を作る。離は別なり。騷は愁なり。経は徑なり。言こころは、己、放逐され離別し、中心、愁思し、猶を道徑に依り、以て君を諷諫するなり。（「離騷」序）

太史公曰く、「離騷」は、猶を離憂なり。

班孟堅曰く、離は猶を遭なり。己、憂に遭ひ辞を作るを明らかにするなり。

顔師古云く、憂動を騷と曰ふ。

余　按ずるに、古人、離騷を引くも、未だ経と言う者有らず。蓋し後世の士、其の詞を祖述し、これを尊び経と為すのみ。屈原の意に非ざるなり。逸の説、是に非ず。（補注）

補注では、「経」を王逸がすでに使っているのは間違いであると指摘している。宋代になると、洪興祖「補注」、朱熹『楚辞』集注など、『楚辞』全体に対する研究が進む。その中でこのように、各時代の研究の結果が集められ比較検討される。「離騷」は、文字に記録された時から、漢字のもつ多義性が理解を困難にさせる運命をもち、各時代の訓詁が生まれるのである。劉向の『楚辞』全体に対する解釈は、「屈原賦」の編纂から始まっている。それは、また『漢書』の傳にまで影響しているのである。

四　まとめ

『漢書』藝文志の総序、および、「詩賦略」序には劉向の編纂方針が明確に述べられている。それは『詩経』精神の継承を以て各書籍の価値を見出すという点にある。つまり孔子の後、戦国期を経て、『詩経』精神を引き継ぐものとして詩賦を評価するのである。その根柢には屈原とその作品があった。そのため、詩賦略は屈原賦を全詩賦の最初に置くのである。これに関係する屈原の伝記、「離騷」、王逸注『楚辞』の全体像が、『史記』と『漢書』の編纂と関連しながら固定されていく状況の一部を考察してみた。屈原の存在、『楚辞』の作者など文学史では古代から続く大問題が関わる考察である。引き続き、具体的な作品研究、関連人物の研究を通して考察を進めていきたい。

注

（1）『楚辞』研究の現状に関しては、次の研究書の序章の中で端的にまとめられている。
矢田尚子『「楚辞」を読む』（東北大学出版会　二〇一八・一一）

（2）散逸した目録としては、魏・鄭默『中経』、晋・荀勗『中経新簿』、宋・王倹『七志』などがある。

（3）『二十五史藝文經籍志考補萃編』王承略　劉心明　主編（清華大学出版社　二〇一四・三）『漢書』藝文志に関するものは、
第一巻『漢書藝文志　漢藝文志考證　漢藝文志考證校補』　第二巻『漢書藝文志疏證　漢書藝文志拾補』　第三巻『漢書藝文志條理』　第四巻『漢書藝文志講疏　漢書藝文志注解』　第五巻『前漢書藝文志注　漢書藝文志約説　漢志藝文略　漢書藝文志校補存遺　漢書藝文志箋』等

（4）ここには、顔師古注として如淳曰、「劉歆七略曰『外則有太常、太史、博士之藏、内則有延閣、廣内、祕室之府』。」がある。「七略」は、『隋書経籍志詳攷』（興膳宏・川合康三著　汲古書院　一九九五・七）によると唐代には完全に存在していた。

（5）矢田尚子『「楚辞」を読む』（東北大学出版会　二〇一八・一一）序章、参照。

（6）「孫卿賦」荀子、また荀卿は、前漢時代、宣帝劉詢の諱を避けて孫卿と記載された。この論文では、その「孫卿」を使用する。

（7）「傳曰、不歌而誦謂之賦、登高能賦可以為大夫。」について、顔師古注がない。『漢書藝文志講疏』では「誦、諷也。今曰背誦。賦、敷也。能敷陳事物也。毛詩傳曰、建邦能命龜、田能施命、作器能銘、使能造命、升高能賦、師旅能誓、山川能説、喪紀能誄、祭祀能語、君子能此九者、可謂有德音、可以為大夫也。鄘風・定之方中傳。」という。出典は『詩経』の毛傳ではあるが、解釈の上で適格性に問題が残る。

（8）顔師古曰「論語、載孔子戒伯魚之辭也。」また『論語』は陽貨篇に「子曰、小子、何莫學夫詩」などがある。『論語』に散見する。

（9）顔師古曰「辭人、言後代之為文辭。」ここは揚雄『法言』吾子篇からの引用である。

(10)　顔師古曰「言孔氏之門、既不用賦、不可如何。謂賈誼、相如無所施也。」『漢書藝文志注釋彙編』では『儀徴劉申叔遺書』論文雑記を引いていう。「劉光漢曰、敘詩賦為五種、而賦則析為四類。屈原以下二十家為一類、陸賈以下二十一家為一類、荀子以下二十五家為一類、客主賦以下十二家為一類。」清・劉師培『論文雑記』(『儀徴劉申叔遺書』五　廣陵書社　二〇一四・二)

(11)　『漢書藝文志注釋彙編』陳國慶編（中華書局　一九八三・六）

(12)　『隋書経籍志詳攷』によると、「離騒」と名のつくものは、『「離騒」草木疏』のみであり、唐代、存在する。それ以外の複数の漢籍はすべて『楚辞』と名がつく。

(13)　『漢書藝文志講疏』顧實講疏（上海古籍出版　一九八七・二）

(14)　王逸が劉向の文を引用したといわないために、この序文は劉向が書いたという説もある。朱熹『楚辞集注』においてもこの二十五篇の分類を採用する。

(15)　『春秋左氏伝』に見える「賦」はこの例である。

隱公元年・夏五月・傳、公從之、公入而賦。大隧之中、其樂也融融。姜出而賦、大隧之外、其樂也泄泄。

杜注云、賦、賦詩也。

正義云、賦詩、謂自作詩也。

「杜注」では「詩を賦す」といい、「正義」では「詩を賦す」は「自ら詩を作る」という意味だという。

また僖公五年春・傳、初、晉侯使士蔿為二公子築蒲與屈。不慎、……詩云、懷德惟寧、宗子惟城、(大雅・板)……

三季將尋師焉、焉用慎。退而賦曰、狐裘尨茸、一國三公、吾誰適從。

ここで「詩」は『詩経』、「賦」は自作の詩である。